

# 60歳以上のアマチュア劇団かんじゅく座 第13回公演「方舟は飛沫をあげて」

第117号 2018年5月27日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に応えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていけるよう  
活動していきます。

株式会社ガヤ 奥山卓矢

## 演出家あいさつ

今回の演目は、かんじゅく座第4回公演のリメイクです。主人公の栄子が実家を処分するに当たって、1960年代、70年代の青春時代を回顧するかたちで物語がすすみます。64年の東京オリンピックの話題も出てきますが、座員たちには、2つのオリンピックを体験することになる世代として、本読み段階から意見や提案を貰いながら、書き直し 作業を重ねました。

1964年に7歳から27歳だった座員たちの言葉に含まれるあの時代への思いは、年齢や住んでいた場所によって様々ですが、自分の思い出話をはじめると、いつも以上に饒舌で、嬉々とした表情で話すのです。

とにかくたくさん言葉が飛び出しました。そして概して「あのころの日本は、みんな元気だった」と振り返るのです。

一方、1973年に生まれた私は、劇中で題材になっている「家」の処分について、特別な思い入れがあり、稽古中にも自分の過去の記憶が鮮明によみがえり、なんども目頭が熱くなりました。が、いよいよ涙が流れそうになると、いいタイミングで座員がセリフを忘れてたり、全然違う 衣装で登場したり、とその都度、苦笑いにすりかえられてしまいました。

苦笑でも爆笑でも、笑いがある現場というのはいいものですが、それとは裏腹に、加齢のハンディは切実です。「稽古場に来るだけで疲れる」「衣装を着替えるだけでひと仕事」という声が聞かれるようになって、劇団の在り方や、芝居創作期間、稽古の進め方などを、見直すことが増えています。例えば、「衣装を着替えるのが大変だから、家から来てきたい」などというビックリ発言も、今後は「あり！」になるかもしれません。

そんな一般的な演劇の現場ではタブーなことを強いられても、なお私がかんじゅく座を続けているのは、高齢者の演劇活動に様々な可能性と 社会性を



[かんじゅく座オフィシャルサイト](#)



今年の演目パンフレット

### ●過去のバックナンバー

#### 第114号

令和生まれ

#### 第115号

むかしの田んぼ\_田植え

#### 第116号

季節の行事\_水口祭り

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>

感じているからですが、もうひとつ大きな理由は座員への「愛着」です。これほど厄介で、説明が難しく、でも人間らしい感情があるのでしょうか。

座員にとっても、舞台や仲間への「愛着」というのは、演劇を続ける大きな理由になっていることを思います。そんな座員たちと手に手を携えて、今日の舞台に挑みます。

作演出・企画制作 鯨エマ

## 公演を観終えて感じること

今年も横浜にあるY保育園の園長から今年も劇の招待を頂きました。舞台名は、澤はま児。普段は保育園の園長として働きながら公演に向け今年も日夜練習に励まれていたそうです。

保育園で子どもたちが発表する場合には、言語や表現の発達を保護者に伝える意図があると思いますが、かんじゅく座の座員の皆さんはきっとそれだけではない別の意味があるのだと感じます。

今回でこれまでに4回の公演を観させて頂いていますが、60歳以上の劇団ということに最初は随分と驚かされ、舞台に立ち、自分を表現できるということにも凄い！と思いました。

今回は1964年の東京オリンピックが舞台背景にありましたが、間もなく2020年のオリンピックを迎えようとしています。

開会式や閉会式のチケットは当たるかな？日本人選手はメダルが獲得できるかな？など楽しみではありますが、それぞれの人生において、光り輝くものがあることを今回の公演を観ながら思いました。

そして、澤はま児さんのように舞台の上でも、普段の生活においても自信をもって表現できる自分でありたいと感じました。

(報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢)

**CAGUYA**

〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、  
QRコードからお願いします。